

コハクチョウに関する日ソ共同研究

藤 卷 裕 蔵

A. Ya. コンドラチェフ博士の提案

1983年9月に日本野鳥の会の招きで、ソ連から3名の鳥学者が来日した。そのうちの一人がA. Ya. コンドラチェフ博士である。彼はソ連科学アカデミー・極東学術センター・北方生物諸問題研究所に所属し、チュコト半島をはじめとし、ソ連極東北部の鳥類を研究している。なかでもコハクチョウに強い関心をもっており、この度、コハクチョウについて日ソ共同の研究を行うことを提案した。

ハクチョウの保護やそのための観察を行っている私たちにとって、これらの鳥の繁殖地での生活がどのようなものかについて大変興味があることである。ハクチョウにかぎらず、渡り鳥の保護とそのための研究には、繁殖地と越冬地の両方での研究が必要であり、私もコンドラチェフ博士のこの提案には賛成である。この共同研究については1984年総会で提起され、会員の皆さんの基本的な賛同は得られているが、この企画をさらに進めるために、もうすこし詳しく紹介したいとおもう。

コンドラチェフ博士の提案は次のとおりである：

コハクチョウの繁殖地での生態については多くの資料があるので、これについてはソ連の研究者がまとめ、越冬地での生態については日本側でまとめる。まとめた結果については、論文のシリーズとして発表する（繁殖期の生態についてはすでに論文が出ており、そのうち1編の訳をこの号に掲載した）。そして、できればそれらの全体をまとめて1冊の本にしたい。このような本が出版されれば非常に有益であり、ソ連ではこのような本の出版は可能である（ただし、ソ連で出版した場合にはロシア語となる）。

このような提案に対して、日本側ではどのような研究成果がだせるかについて、北海道の会員の有志が1986年1月に札幌に集まり、相談の上一つの試案をつくってみた。それは、これから新たに調査をするという内容のものではなく、これまでに行ってきた観察の継続である：

- 1) 越冬地と越冬数。
- 2) 給餌場所、給餌期間、餌の種類など。
- 3) 越冬地で死亡数（できれば死亡原因：死体を専門家に送り調査依頼）。
- 4) 渡来期と渡去前の成鳥：幼鳥比。
- 5) 保護対策の紹介。

以上である。

これらの研究成果を1冊の本にまとめるかについては、将来の問題で、とりあえずできる事から、資料を蓄積し、それをまとめてシリーズとして発表してはどうかと思う。

会員の皆の協力を期待します。

ハクチョウ類の成・幼比を調べよう

1983年に来日したソ連科学アカデミー・北方生物問題研究所(マガダン)のコンドラチェフ博士から、コハクチョウについて越冬地と繁殖地とで日ソの共同調査をしようという提案があった。これに対して日本白鳥の会では、総会でこの提案を受け入れることを確認したが、いまのところ実際の調査は進んでいない。

新たに調査を始めようとするのが困難なことも多いので、これまでに行なわれてきた観察の範囲内で出来ることをやってみようか。その一つに成・幼比を調べることもある。

ソ連のアナジール川流域でオオハクチョウを調査しているクレチマル博士によると(Krechmar 1982)、産卵数は4-6、平均5.3である。孵化した幼鳥は9月下旬までには飛べるようになるが、十分大きくなる9-10月までには1家族あたりの幼鳥数は、孵化時の半分以下の2.3羽になっている。

私がかつてウトナイト沼でオオハクチョウの成・幼比を調べたところ(Fujimaki & Matsuoka 1971)、秋には50%近くが幼鳥であったのに、翌年の春には20%くらいまでに少なくなっていた。これは明らかに冬の間の死亡率が幼鳥で高いことを示している。

このように、日本における越冬中の死亡率が明らかになれば、その結果は日ソの共同研究になると思う。

そこで、各地の越冬地で定時観察のときにコハクチョウとオオハクチョウの成・幼比を次のような項目で調べることを提案するしだいである。

- 1) 一緒に行動していて家族と思われる群の成・幼比を調べる。この場合、10-20家族について調べ、同じ家族を重複して調べないようにする。
- 2) もし可能であれば、全体の成・幼比も調べる。

越冬中の群は、A) 家族(成鳥と幼鳥)、B) 成鳥(成鳥と幼鳥でいたが、越冬中に幼鳥全部が死亡)、C) 成鳥(外見は成鳥と同様であるが、繁殖しなかった)から成る。上述のような調査でB)のような場合があると、1)の調査だけでは死亡率を過小評価することになる。したがって2)のように全体の成・幼比も調べ、1)の調査を修正する必要がある。ただ越冬中にはB)のような成鳥とC)のような成鳥との区別はできない。これは繁殖地で繁殖しない成鳥タイプのものがどのくらいいるかがわかると、この資料にもとづいてB)、C)の比をおおまかに推測できると思う。ただし、越冬中には成鳥も死亡するので、このような成・幼比から得られる幼鳥の死亡率は実際より過小になる可能性がある。

このようにいくつかの問題点はあるが、成・幼比の調査から越冬中の幼鳥の死亡率の概要を知ることができるとであろう。

文 献

藤巻裕蔵 1985. オオハクチョウの生態. 採集と飼育 47(12):522-525.

Fujimaki, Y. & S. Matsuoka 1971. The birds of Lake Utonaito in autumn and winter. *Tori* 21:316-324.

Krechmar, A. V. 1982. Ecology of *Cygnus cygnus* in the Anadyr River Basin. *Zool. Zhur.* 61:401-02.